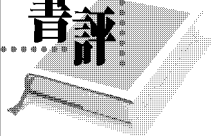


書評



本多 裕著

ナルコレプシーの研究

知られざる睡眠障害の謎

大熊輝雄

本書は、序言に述べられているように、睡眠障害の専門医として 40 年以上ナルコレプシーの治療・研究にあたってきた著者が、ナルコレプシーの謎を解き、患者さんや家族の方にナルコレプシーはきっと治る、完治しないまでも安心して社会生活を送れるようになるというメッセージを伝えたいと願って執筆されたものである。

ナルコレプシーは、以前には日中の強い眠気、情動脱力発作、入眠時幻覚、睡眠麻痺(金縛り)などの一見関係のなさそうな症状を持つ珍しい過眠症として、てんかんと並んで記載されていたが、最近は睡眠学の進歩によって、レム睡眠の障害を伴う疾患であることがわかっている。本多博士はご自身で診療した 900 名近くの患者さんについての調査結果から、日中の居眠りと情動脱力発作が診断に重要であることを明らかにした(第 5 章)。本書によると、本多博士は、精神科に入局当初から間脳機能の障害として精神障害を理解しようと試み、間脳症の一つとしてナルコレプシーを取り上げたとのことである。そして、睡眠研究のために東大精神科に睡眠外来を設立してチームとして診療、研究を始め、また遺伝研究などでは積極的に部外の研究者と協力して研究を進め、次々と大きな研究成果を挙げていかれた。

評者が最も興味深く読んだのは、多くの研究がそうであるように、本多博士の研究の道のりにも多くの幸運と不運があったことである(第 3 章)。今は作家として有名な加賀乙彦(小木貞孝)博士がたまたま東大外来でナルコレプシーの眠気の治療に抗うつ薬イミプラミンを処方し、これは眠気には効かなかったが情動脱力発

作に著効を示し、世界で最初の情動脱力発作治療薬発見となったのは幸運であった。しかし、高橋清久氏(現国立精神・神経センター総長)らと健常者やナルコレプシー患者の睡眠時の成長ホルモンを測定し、健常者では入眠時の徐波睡眠期に大量の分泌があること、ナルコレプシーではこれがないことを世界で始めて発見し、その結果を国際誌に投稿し受理されたが、折からの東大精神科内部の混乱のために原稿の返送が遅れ、1 か月の差でアメリカ留学中に同様の発見をした高橋康郎博士が国際的には第 1 発見者になってしまったとのことで、これは本多博士にとっては残念なことであった。

本多博士のナルコレプシー研究者としての名声を不動なものにしたのは、白血球の抗原(HLA)の特異性を世界で最初に発見したことであり、これも遺伝研究を行っていた東大精神科出身の浅香昭雄博士らとの共同研究の成果であった(第 3 章)。また著者は一貫してナルコレプシー患者の治療、社会でのノーマライゼーションに力を注ぎ、世界で最初に患者会としての「なるこ会」を創立して互助運動を進め、また道路交通法の改正にあたってナルコレプシー患者が不利にならないように絶えず当局に対して発言を行うなど、臨床家、治療者としての実践活動を行っておられる(第 6,7 章)。

本書は一般の人たちのナルコレプシー理解に役立つとともに、専門家、特に若い研究者の方々には、臨床診療や研究がどのように進められるべきかを教える貴重な教科書になるであろう。

(大熊クリニック)

● 四六判 179 頁 2002 本体 1,600 円 悠飛社刊